

大学入学共通テストおよび国公立大二次・私大

大学入試

分析と対策

2026
令和8年度

英語

学校法人 河合塾
英語科講師 江本 祐一

啓林館

この冊子の内容は次の URL からアクセスできます
[https://www.shinko-keirin.co.jp/
keirinkan/kou/english/support/](https://www.shinko-keirin.co.jp/keirinkan/kou/english/support/)

(1) 概要

6年目となった共通テストは、多少の出題形式の変化はあるものの、「コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、情報や考えなどの概要や要点、詳細、話し手は書き手の意図などを的確に理解する力を引き続き重視する」、「情報や自分の考えを適切に表現したり伝え合ったりするために、理解した情報や考えを整理したり、何をどのように取り上げるかなどを判断したりする力を重視する」、「コミュニケーションを支える基盤となる音声や語彙、表現、文法等に関する知識や技能についても、上記の力を問うことを通して引き続き評価する」という例年通りの問題作成方針に従った出題であった。リーディングでは、大問数は変更のあった25年度と同様に8題で、25年度の新形式であった第4問のレポートの推敲問題、第8問の3つの段階を踏んでレポートを完成する問題が引き続き出題された。23年度から出題の続いている物語文の出題も第6問に出題された。リスニングでも、第5問の間32、問33が2人の発言を聞き取り答える形式であること、第6問Bの会話が3人のものであることは、25年度の変更を踏襲している。第4問Aは偶数年度と奇数年度で出題形式が固定されており、偶数年度の26年度はイラストの並べ替え問題である点は従来通りであるが、5枚のイラストから4枚を選んで並べ替える問題が出題されたのは新しい。選択肢等を含めたリーディングの語数は約5,600語で、24年度から約700語減少した25年度とほぼ同じ。リスニングの読み上げ語数は約1,600語、設問等の読むべき語数は約500語で、いずれも25年度とほぼ同じ。マーク数は、リーディングは44、リスニング37で、25年度と同じであった。大学入試センター発表の平均点は、リーディングは62.85点で、25年度の57.69点から5.16点上がった（24年度は51.54点、23年度は53.81点、22年度は61.80点、21年度は58.80点）。リスニングは54.64点で、25年度の61.31点から6.67点下がっている（24年度は67.27点、23年度は62.35点、22年度は59.45点、21年度は56.18点）。リーディングの平均点は2年連続して上昇しているが、24年度以前と比べると、全体の語数が減ったこと、正解を選ぶのに迷い時間を浪費するような問題が特になかったこと、さらには各種模擬試験で試作問題に類似の問題に数多く触れることで、受験生の側の対応ができていたことが原因と考えられる。逆に、リスニングの平均点

は2年連続して下がっているが、これは、24年度以前と比べると全体として読み上げの速度が速くなっていること、第4問Bのイラストが増えたこと、第5問のワークシートの補充が例年通り答えにくい問題であったこと、それ以外にも、特に第5問以降に答えにくい問題が多く出題されていたことが理由として考えられる。リーディング、リスニングともアメリカ英語だけでなくイギリス英語も出題されている。また、本文の表現、読み上げられた表現を言い換えた選択肢が正解になる問題、複数の部分から集めた情報を元に正解を選ぶ問題が出題されている。

(2) リーディング

第1問 チャット形式のメッセージのやり取り

ダンスコンテストでの衣装に関するメッセージのやり取りに関する問題。25年度と同様にイラストを選択する問題の正答率は、河合塾の共通テストリサーチでは50%に届いていない（以下正答率は河合塾の共通テストリサーチによる）。

第2問 ウェブサイトの読み取り

「大学生の寮生活についてのアンケート結果」に関するウェブサイトを用いた問題。25年度同様に「事実」ではなく「意見」を問う問題が問1で出題されている。正答率は40%台の前半であり高くない。

第3問 エッセーの読解

「禅体験で学んだこと」を述べたエッセーの読解問題。5つの選択肢の中から4つを選び時系列に並べる問2の正答率は50%を超える程度で、あまり出来は良くない。また、From the instructor, the author most likely understood the importance of being to all living things.の空所を埋める問3の正答率も50%に達しておらず、① attractiveを選んだ受験生が多かった。「すべての生き物は魅力的だ」ということかもしれないが、「すべての生き物に対して であることの重要性」という意味がとれていなかったのだろう。

第4問 ニュースレターの推敲

初出の25年度同様に26年度も比較的よくできており、全体の得点率は80%前後。必要な情報を補ったり、文全体の趣旨に合うように英文を修正したりする問題が出題された。

第5問 リーフレット・オンラインフォーム・メールの読み取り

図書館のイベントに関するリーフレット、推薦する絵本のオンラインフォーム、図書館からのメールが出題さ

れた。複数の部分から情報を集めてきて正解を選ぶ必要があった。全体の正答率は約63%であった。

第6問 物語文の読解

「おにぎりの思い出」を扱った物語を読み、その内容を発表するためにアウトラインを整理する問題。24年度、25年度同様に、時系列に沿って書かれているのではない物語文が出題された。おにぎり屋の店主に関する情報を2つ選ぶ問1の正答率は27.5%で、26年度の問題の中では最も正答率が低かった。また、出来事を時系列に並べる問2の正答率は38.9%。25年度の30.1%ほどではないが、本文が出来事順に書かれていない英文を読み、ダミーが1つ含まれる5つの選択肢から4つを並べるのは、なかなか困難であるようだ。② Mitsuki wrote a message to the son of the old man. がダミーの選択肢であるが、50%近い受験生がこれを使って並べてしまった。

第7問 論説文の読解

「心がさまようことの効果」に関する英文を読み、発表のためのスライドを完成する問題。25年度に出題のあった不要なものを選ぶ問題、適切なグラフを選ぶ問題、タイトルを選ぶ問題の出題はなかった。全体の正答率は40%少々であった。

第8問 エッセーの作成

25年度と同形式で、「スポーツをテクノロジーの進歩」に関する複数の意見と資料に基づいて、3つのステップを経てエッセーを完成させる問題が出題された。全体の正答率は、25年度は40%に満たなかったのに対して、26年度は約60%であった。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

例年、後の問題になるにつれて正答率が下がっていくが、25年度は第8問の正答率は60%で、比較的よくできていた。共通テストのリーディングの問題は独特な出題形式だが、25年度に比べると練習材料が充実したことで受験生が問題慣れし、対策ができていたのではないかと思われる。とは言え、80分という時間の中で、5,600語の英文を読み、設問に答えるには速読力が必要と言えるかもしれない。ただし、内容理解を伴わない速読力には意味がないことは言うまでもない。文法的理解に基づいた正確な読解力を養い、語彙力を高めていくことで、自然に英文が正確に速く読めるようになる、ということを目指すべきである。読み返しを減らすことが、結果的には速読力を高めることにつながる。また、本文中の表現そのものが正解の選択肢となることはまずなく、何らかの言い換えがなされているのが普通であり、

その意味では単語・熟語の知識の拡充も必要である。受験生に馴染みのない単語が含まれることが増えているが、全体の内容がわかれば問題にならない程度のものである。普段から、わからない単語があっても全体を読み切るようにトレーニングすることが必要であろう。

(3) リスニング試験

第1問 A：短文の内容一致 B：短文のイラスト選択

Aでは短い発話を聞きその内容と合っている英文を選ぶ問題が4問、Bでは短い発話を聞きその内容と合っているイラストを選ぶ問題が4問出題された。比較的解答しやすく、全体の正答率も高めだが、この部分の読み上げ速度は25年度以降速くなっており、全体の正答率は25年度と同様に62.0%（24年度は82.0%）であった。正答率の低かった問2を取り上げる。

[スクリプト]

My son is sick. I'm afraid that I can't come into work today.

[選択肢]

- ① The speaker can't go home to care for her child.
- ② The speaker is afraid to care for her child today.
- ③ The speaker is going to take the whole day off.
- ④ The speaker isn't feeling well enough to work.

2026年度大学入学共通テスト 英語 リスニング 第1問

I'm afraid that I can't come into work today. から、話し手は今日は仕事に行けないということを理解し、③を正解に選ぶ問題であるが、表現の言い換えレベルが高かったのか全体の正答率は37.6%であった。選択率の最も高かった誤答は②で、27.3%の受験生が選んでいる。第1文のMy son is sick. は聞き取れたが、第2文はよくわからず、聞こえてきたI'm afraidを手掛かりに②を選んだものと考えられる。

第2問 対話文に一致するイラスト選択

短い対話文とそれに関する問いを聞き取り、その答えとして適切なイラストを選ぶ問題が3問出題された。第2問全体の正答率は65.0%で、すべての大問の中では最も高いが、25年度は85.2%、24年度は91.8%であったことを考えると、ここでの得点率の低下も全体の平均点が2年連続して下がった要因の1つと言えよう。問10は92.9%の正答率で、26年度の問題の中で最も正答率の高い問題であった。この問題は女性のI exercise indoors using virtual reality. という発言から解答を選ぶもの。実際の正答率の高さにもかかわらず、私自身は

恥ずかしながらイラストの中で女性が顔に装着しているものがvirtual reality関連の機器であることにすぐには気づけず、苦戦してしまった。

第3問 対話文の内容一致

例年通り、短い対話文を聞き取り、一致する選択肢を選ぶ問題が6問出題された。第3問以降は音声は流されるのは1回のみ。聞き取った内容を言い換えて正解を選ぶ力が試される。全体の正答率は例年6割程度であるが、26年度は53.8%（25年度は61.5%）で、ここでも正答率が下がっている。

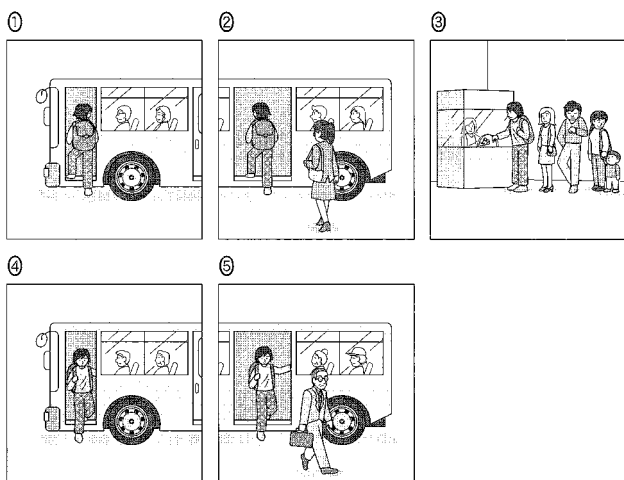
第4問 A：イラストの並べ替え問題 B：複数発言からの判断

先にも述べた通り、偶数年度の26年度は、Aではイラストの並べ替え問題が出題されたが、24年度、22年度と異なり、ダミーのイラストが1枚含まれていた点が新傾向。そのためかここでの得点率は22.2%と大きく下がっている（24年度は89.6%、22年度は95.4%の正答率）。スクリプトとイラストは次の通り。

Question No. 18 to 21

(1) To get to *Nishizawa High School* from here, you first take a city bus to the city center and change to a *Yamatetsu* bus. (2) On the city bus, you get on at the back. (3) When you get off at the front, you pay. (4) At the city center, just ignore the line of people and look for the *Yamatetsu* terminal. (5) With the *Yamatetsu* bus, you pay at the front as you board. (6) Then you exit from the back door when you reach the *Nishizawa High School* stop.

(文番号はこちらで追加。以下同じ)



2026年度大学入学共通テスト 英語 リスニング 第4問

イラストを見て際立っているのはドット柄のパンツの人物の動きで、①②では乗り込んでいるところ、④⑤

では降りているところ。①④ではこの人物のみで、②⑤では他にも人物がいる。③は並んでチケットを買っている様子が描かれている。しかし、解答を得るために必要なのは、バスの前後のドアのどちらから乗り、どちらから降りるのかということで、これは最初にイラストを見たときに意識しなかった受験生も多かったのではないだろうか。解答のプロセスは、スクリプトの第2、3文から②→④と並べた後、第4文のAt the city center, just ignore the line of peopleから③をダミーと判断し、第5文のyou pay at the front as you boardから①を選び、第6文から⑤を選ぶということになるが、最初の②の正答率は58.2%で、この時点で40%を超える受験生が間違えている。また、ダミーの③を外して①を選ぶべき3つめの解答での正答率は35.4%で、かなりの受験生がここで間違っている。受験生も教師も、英文の選択肢を選ぶよりはイラストを選ぶほうが問題としては簡単という先入観があるかもしれないが、必ずしもそうとは言えないこと、またダミーの選択肢が1つ入ると一気に正答率が下がってしまうことが、この問題からうかがえる。Aの後半は例年通り、表の空所を埋める問題（イベントの概要）が出題された。「選択肢は2回以上使ってもかまいません」という指示文があるが、24年度、25年度同様に実際に複数回使う選択肢はなかった（23年度、22年度には複数使用の選択肢あり）。Bは例年通り、4人の説明を聞き取り、示された条件に最も合うものを選ぶ問題。Bの正答率は25年度より高く、70%を超えていた。

第5問 講義

海の無い国で行う新たな海洋資源の養殖方法に関する講義を聞き、25年度同様にワークシートを完成する問題、2人のメンバーの発言が講義内容と一致するかを判断する問題、グラフつきの内容一致問題が出題された。例年この大問の正答率は低いですが、25年度の37.2%からさらに下がり、35.0%だった。正答率が低かったのは、完答で正解となる問28、29と問32であった。

問28、29の該当箇所は次の通り。

[スクリプト]

(1) Fish farming is an important part of global efforts to fight food shortages. (2) While freshwater fish farming is common in Southeast Asia, saltwater fish farming has grown rapidly over the past 30 years. (3) Saltwater fish farming, which produces fish such as salmon and tuna, generates

great financial rewards in the international market.

〔ワークシート〕

Conventional methods

Freshwater fish farming: in Southeast Asian countries

Saltwater fish farming: highly worldwide
〔選択肢〕

- ① experimental ② improved ③ profitable
④ researched ⑤ reused ⑥ widespread

2026年度大学入学共通テスト 英語 リスニング 第5問

には第2文のcommonを言い換えた⑥widespreadが、には第3文のgenerates great financial rewardsを言い換えた③profitableが入るが、で⑥を選んだ受験生は36.8%、で③を選んだ受験生は23.4%で、正解となるために必要な両方を正解した受験生は12.6%に過ぎず、26年度で最も正答率の低い問題であった。

問32はグループの2人のメンバーの発言が講義内容と一致するかどうかを判断する問題で、これも正答率は18.8%と低かった。Student AのScientists have invented new minerals that allow fresh water fish to live in seawater.が本文一致していると考えて、①の「Aの発言のみ一致する」を選んだ受験生が48.0%、③の「どちらの発言も一致する」を選んだ受験生が12.1%であった。モンゴルのような海のない国での海水魚の養殖という話題であることから、「科学者が特別なミネラル成分を発明した」と考えたのかもしれないが、対応する英文は第1パラグラフ第3文It is made by adding selected minerals found in seawater to freshwater.で、ここでは「海水中で発見された選ばれたミネラル成分を追加する」とあることから、Student Aの発言は不一致である。ここでは、特に正確な聞き取り力が問われている。

第6問 A：対話文内容一致 B：対話文内容一致とグラフ選択

Aでは、フランス語の授業の3つの受講方法に関する2人の会話を聞き、例年通り発言中に表明されている意見を選択する問題が出題された。問35は正答率が20.6%であった。Derekによるオンラインクラスの力説を聞いて、JessicaはWow. I didn't realize that. I think I will take advantage of those extra benefits.と答えたこと、それに続くDerekのSo we'll be in the same class

after all?に対して、Jessicaは最後の発言でNo, I still want to show up to the classroom to meet my friends as well.と答えていることから、Jessicaはオンラインクラスの利点を利用しつつも、教室に顔を出したいと考えていることがわかるので、隔週で対面授業が行われるハイブリッドクラスを選択すると判断すべきであるが、Jessicaの最後の発言だけを根拠に、61.5%の受験生が①のThe face-to-face classを選んでいった。複合的な判断が求められると正答率が下がるようである。Bでは音楽の聴き方に関する3人の会話を聞き、会話が終わった時点で以前より音量を下げようと思っている人の人数を答える問題(問36)とVickyの考えの根拠となる図表を選ぶ問題(問37)が出題され、25年度までと同様の出題形式。第6問全体の正答率は47.8%で、これも25年度の65.0%、24年度の73.9%と比べると大きく下がっている。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

本文の英語がそのまま解答になるわけではなく、1か所だけから解答が決まるわけではない点は、リーディング、リスニングに共通した特徴である。また、同じ内容が別の表現で置き換えられた場合にいかによく対処できるのか、ということが決め手になることが多いというのも従来通りだが、正答率の低い問題を検証してみると、25年度は特にその傾向が顕著にみられた。リーディングの問題のほうが、読み直しができる分、リスニングの問題と比べると解答に手間のかかる問題となっているのは確かだが、実質的な違いはほとんどない。その意味では、リーディングの問題をリーディングの問題として扱った後、本文を音声化して、リスニング問題として活用する、といった活用法も考えられる。リーディング問題の英文は分量が多いが、一度リーディング問題として扱った後であれば、リスニング対策として有効であろう。

2

国公立二次試験

(1) 概要

東京大：25年度の2,860語に対して26年度は3,224語で分量は増加し、難易度も上がった。2(B)で和文英訳に加えて空所補充問題が出題され、5で小説が出題された点が25年度からの変更点。1(A)の英文内容の難度が上がり解答作成が難しくなった。2(B)の和文英訳問題は25年度に長文化したが、26年度も同様の長

さの出題であったが、25年度同様に比較的英訳しやすい問題だった。4(A)では19年度から誤文指摘問題が出題されているが、26年度は英文量が大幅に増えた。4(B)では25年度はsoの内容の明示を求める和訳問題が出題されたが、26年度はunweavingの内容を補って訳す問題が出題され、4(B)全体は25年度より難しくなっている。5の(A)では物語文全体の内容を踏まえて答える必要があり、答えにくい出題となっている。

京都大：2題の読解問題では、通常の下線部和訳3問と、語句の内容を補足しつつ和訳する問題1問、下線部の内容説明問題2問という内容であった。Ⅰは、aerobiology「大気生物学」という馴染みがない学問を扱った英文で、戸惑った受験生も多かったようである。Ⅱでも、知識の記録方法が一周してメソポタミア文明の時代の方法に戻っている、という意外な展開の英文が出題された。構文や単語レベルで特に受験生にとって厳しいものは出題されていない。従来、内容説明問題や語句の内容を補足して和訳する問題では解答欄の大きさが解答量の目安となったが、Ⅰ、Ⅱともに解答用紙が2枚となり、必要以上にスペースが与えられた。Ⅲの和文英訳問題は25年度同様に処理しやすい出題で、これまでの学習成果が如実に反映する出題であった。Ⅳの自由英作文では、「世界を住みやすい場所に変えるためにできる1つのことを説明せよ」というかなり漠然とした問題。25年度同様に「導入→本文→結論」という流れて書くようにという指示が与えられている。解答用紙は25年度同様に1行に4語書く形式のもので、語数を数える手間は省けるものの、ミスに気づいた場合の修正にかなりの手間がかかってしまうので、解答用紙に書き始める前にしっかり考えておかなければならない。

北海道大：25年度から出題形式に変化はないが、長文読解問題の総語数が100語程度減少した(25年度は400語程度増加)。Ⅰ、Ⅱの読解問題で例年出題されてきた内容や理由を説明する問題の出題がなくなり、下線部和訳問題の出題が増えた。Ⅳの会話文の要約問題は北海道大に独特な問題であるが、要約の元となる会話文自体ほとんど読まなくても解答できる。

東北大：読解問題では、25年度にⅠで出題された本文の内容をまとめた図表の空所を埋める、といった共通テスト的な形式の問題の出題はなくなった。「環境難民」(2022年度)、「人間の脳とAIの違い」「男性の美に関する考え方の多様化」(23年度)、「アメリカ社会

における教育格差」(24年度)、「オーバーツーリズム」(25年度)と時事的な問題を扱った英文が出題されることが多いが、26年度はそうではなかった。

一橋大：25年度にリスニング問題が廃止されたが、それに代わる問題の出題はなかった。26年度も25年度と同様の問題構成で、従来と比べると時間に余裕のある出題。24年度、25年度は読解問題Ⅰが和訳と内容説明の記述問題、Ⅱが空所補充と語句整序の客観問題という出題で、Ⅱは該当部分だけで解答のできるような出題であったが、26年度はⅠ・Ⅱともに記述問題と客観問題が出題された。Ⅲの自由英作文は出題形式が定まっておらず、25年度は与えられた状況に置かれた人に対するメッセージを書く問題であったが、26年度は3年ぶりに画像の説明問題となり、語数も100~140語から70~100語と減少した。その意味でも時間的な余裕ができたであろう。なお、25年度に出題のあった語の用法を問う文法問題の出題はなかった。

名古屋大：2題出題される読解問題では下線部和訳問題が2問、内容説明問題が1問出題されており、記述量は少ないが、Ⅰで下線部の表す内容を英語で説明する問題が出題された。Ⅲの対話文問題に含まれる自由英作文は例年通りの出題で、30~40語の英文を書く問題。Ⅳの自由英作文は年度によって出題形式が変わり、26年度はグラフから読み取れる傾向(40~50語)とその理由の説明問題(30~40語)が出題された。和文英訳問題は24年度以降出題されていない。

大阪大：25年度に引き続き、外国語学部とそれ以外の学部で共通問題のない出題であった。外国語学部以外で25年度に[Ⅱ]の読解問題で下線部の内容を英語で説明する問題が出題されたが、26年度は本文の内容に関連した40~50語の自由英作文が出題された。[Ⅲ]の自由英作文問題では、25年度はグラフを使った問題が出題されたが、26年度は「ポスト真実の時代に求められる知性や技能」に関する論述問題が出題された。京都大と同様に、日本語であれ英語であれ、記述問題が多いのが特徴である。

広島大：[Ⅰ]で出題される独自の段落ごとの要約問題は、24年度以降は各段落を60字でまとめる問題が出題されている。各段落を同じ字数でまとめるのは難しい。[Ⅱ]の読解問題も24年度、25年度同様に2つの英文を読んで答える問題。[Ⅲ]の自由英作文では「創造性の大切さ」についての100語程度の論述問題が出題され、[Ⅳ]では日本の魚介類と肉類の年間消費量の変化に関するグラフを読み取り、100語程度の英文で

グラフの説明と考えられる理由を述べる問題が出題された。

九州大：25年度同様、読解総合問題3題、自由英作文問題2題という出題。25年度の和訳問題は1問だったが、26年度は4問だった。25年度に出題された読解問題中の英語による内容説明問題の出題はなかったが、[3]で筆者の主張を約30語の英語で要約する問題が出題された。[5]ではグラフの説明問題が出題された。

(2) 読解問題

年度によりある程度のばらつきはあるが、読解問題中の英文和訳の比重は年々下がってきている。そのような中で京都大や大阪大は異例であろう。京都大を目指して予備校にやってくる現役生の多くは、京都大向けのテキストの問題を見て「こんな長い英文を日本語に訳すなんてムリ！」という反応を示すことが多く、夏の京都大系の模擬試験では読解問題で高卒生に差をつけられることが多い。読解、特に和訳に関しては高卒生に一日の長がある。やがては現役生もその差を詰めていくわけだが、和訳を中心とした京都大志望者向けの問題を中心に勉強している高卒生について特徴的なことは、京都大とは対極にあるように感じられる早稲田大・慶應義塾大にも合格する生徒が多いことである。特に予備校で対策をするわけではないが、しっかりとした読解力の下地が作れた受験生は、早稲田大・慶應義塾大の問題にも十分に対応できる、ということであろう。その意味で、和訳の重要性を見直してもいいのではないかと思う。

(3) 表現問題

長文読解や対話文に自由英作文を組み込んだ融合問題が増えている。先述の通り、名古屋大や大阪大、九州大で読解問題中に英語による記述を求める出題がされている。なお、出題形式としては自由英作文の出題のほうが和文英訳問題よりも多いが、和文英訳は自由英作文で正しい英文を書くための前提と言えるので、従来型の和文英訳の練習も不可欠であろう。

3

私立大学

私大の出題形式は千差万別であるが、読解問題では、空所補充、下線部の言い換え、内容一致などのオーソドックスな出題形式に加えて、ある意味トリッキーでパズル的な、運で左右されるような要素を持った出題がなさ

れるのも特徴である。早めに受験大学の問題に目を通して、出題内容を確認しておくべきである。早稲田大、慶應義塾大などを中心に一部の難度の高い大学で、「読む・書く」の技能統合問題が出題されている。空所補充や言い換え問題では、知識を問う場合と、文意を把握したうえで未知の（あるいは難解な）語句の意味を推測する必要がある場合があるので、基本的な語彙力の強化と英文内容の理解力を高めておく必要がある点は、国公立大と違いはない。国公立大・私大を問わず、読解問題の長文化が進んでいるが、客観問題の出題が多い私大の問題は、1題の英文量が多いだけでなく問題数が多いのも特徴で、限られた時間で設問に答えるトレーニングが不可欠である。安易に過去問中心の学習を進めることはできないが、ある程度基礎的な力を身につけたら、過去問演習を中心に学習を進めるべきであろう。ただし、過去問がもう一度出題される可能性はないので、出題傾向の似た他大学の過去問、特に難度の高い大学の対策としては、過去に出典となった出版物やウェブページにあたってみるのもいいかもしれない。紙面の都合で詳しく論じることはできないが、26年度は、早稲田大や慶應義塾大で全体的に英文の難度が高くなっていた。

江本 祐一（えもと・ゆういち）

河合塾で京大、医進の授業を中心に担当。京大系のテキスト、京大オープン（第2回チーフ）、及び高1から高3までの最上位テキストの作成に携わる。出版物は「英語暗唱文ターゲット450」（旺文社）、「入試英単語の王道」（河合出版・共著）など。



— 知が啓く。 —

啓林館

URL <https://www.shinko-keirin.co.jp/>

令和8年 内容解説資料

本 社	〒 543-0052	大阪市天王寺区大道4丁目3番25号	電話(06)6779-1531	FAX(06)6779-5011
東京支社	〒 113-0023	東京都文京区向丘2丁目3番10号	電話(03)3814-2151	FAX(03)3814-2159
北海道支社	〒 060-0062	札幌市中央区南二条西9丁目1番2号サンケン札幌ビル1階	電話(011)271-2022	FAX(011)271-2023
東海支社	〒 460-0002	名古屋市中区丸の内1丁目15番20号ie丸の内ビルディング1階	電話(052)231-0125	FAX(052)231-0055
広島支社	〒 732-0052	広島市東区光町1丁目10番19号日本生命広島光町ビル6階	電話(082)261-7246	FAX(082)261-5400
九州支社	〒 810-0022	福岡市中央区薬院1丁目5番6号ハイヒルズビル5階	電話(092)725-6677	FAX(092)725-6680